

いつもと違う格好の恋人と戯れたら、 久々にS心を刺激されてかなり燃えました

体験版

受け：真壁

攻め：菅原

要素：コスプレ、アナル舐め、媚薬、玩具、焦らし、前立腺責め、亀頭責め、潮吹き、連続絶頂

「なぁ真壁。今日、仕事終わったら俺んち来ない？」

日中、たまたま二人で外回りに出ていた時、遅いけど昼飯にするかと誘った蕎麦屋の店内で、真壁は箸で掴んだ天ぷらを盛大にざるそばの上に落下させた。食事のマナーに厳しい真壁にしては、珍しいミスだ。そして落とした当の本人はというと、天ぷらを見ることもなく俺の方を見ていた。元から大きい目を更に開眼して見つめられると、どこことなく威圧感がある。見つめられる俺も、そばをつゆにつけたまま手を止めていた。

「え、あ、嫌だった...？や、いつも真壁の家に行くばっかで悪いなと思ったからさ？一応片付けはしたし、お前のところほど綺麗じゃねえけどそれなりには——」

「行きます。絶対」

しかし切り替えの早い真壁は、俺がしどろもどろに言葉が続けると、遮って返事をしてきた。そばに乗った天ぶらを箸で掴み、まるで何事もなかったかのように口に含んでいる。だが、食事を口にした時とは別で、頬を色づかせて目を輝かせているので、どうやら俺からの誘いは嬉しかったようだ。仕事中は笑顔のポーカーフェイスを貫く真壁だが、仲が深まると彼は豊かな表情を見せてくれる。

「珍しいですね、菅原さんから誘ってくれるのは。お前んち行っていい？って言うのが定石だと思ってましたが」

「まあ、たまには良いかと思って。片付けとか基本任せてるし、休みの日に真壁もゆっくりしたいだろ？」

「べ、別に僕は、好きでやってるんで、そんな風に気を遣われるほどのことじゃ」

もごもごと、歯切れ悪く喋る言葉の節々に棘は見られるが、これは真壁なりの照れ隠しだ。言葉通り受け取ると大変可愛くない発言だが、解釈すると「菅原さんから誘ってもらえて嬉しい。僕がゆっくりできるように気を遣ってくれる菅原さん大好き」といった具合になる。

素直に楽しみですよと言えない彼に、お前は一体いつになったらその天邪鬼を直せるんだと思う時がたびたびある。けれど、明らかに口数が増えた真壁が露骨にテンションをあげているのが分かったので、そういうところがかわいいんだよなと、結局強くは言えない俺がいた。

しかし、強く出れないのは時と場合による。なんせ、俺がわざわざこの一週間かけて徹底的に部屋を片づけたのは、下心が根底にあるからだ。だから俺の家に来てから超上機嫌になったアイツが、軽く飯も食って、お互いシャワーも浴びて、良い感じでそんな空気になった時。俺が真壁に差し出した衣類を見て鬼の形相になったとしても、めげてはいけない。

「突然の提案ではあるんですが。本日はぜひ、こちらの衣装を着ていただきたいと思っております」

床に正座する俺が、自分の前に仁王立ちする真壁に見せているのは、たっぷりのフリルがついた、いわゆるメイド服だ。しかも、ちゃんと男性用。そこらのディスカウントストアで売られている安物ではなく、それなりに値が張るものを購入した。わざわざ上等なものを用意したのは、彼とコスプレエッチができるとしたら、かなりレア回であると予想されたからだ。それ故に、ご機嫌を取りに取った。昼に真壁の好きそうな蕎麦屋に連れていったのも、朝から甘やかしまくったのも、全部この瞬間に繋がっている。

とはいえ、そう簡単に了承をとれるとは思っていない。どす黒いオーラを放つ恋人は、笑顔の仮面の内側で般若を飼っている。

「あいにくですが、僕に女装の趣味はありませんので。承るにはキツすぎるお話かと」

「いえ、ですがこちら、なんと男性用に仕立てられていますから、着心地もいいと思いますよ？一度袖だけでもお通しいただきたく...」

「それほどおっしゃるなら、まずはご自分で着てみては？」

そして懸念していた通り、下手に出ての交渉の効果は鈍く、真壁は全く揺るがなかった。さすが営業の若きエース。相手を転がすのも一流ではあるが、無茶を吹っ掛けられても動揺しない肝っ玉の座り方は、まさにトップとしてふさわしい。

本来、営業先にここまでかたくなな姿勢を見せられた場合、一度帰って戦略を練り直したほうがいい。しかし、今日の相手はあくまで真壁。恋人として押したらいけると俺は踏んでいる。

よろしい、ならば作戦変更だと、俺はすぐにメイド服を見つめてしおれた声を出した。

「そうか、やっぱり嫌か…。ずっと着てみてほしいと思ってたから、ちゃんといいやつ用意したら一回くらいはって思ってたけど、無理かぁ…」

「うっ、なんっ、なんですその言い方、まるで僕が悪いみたいな」

「これもなぁ、絶対真壁に似合うと思って選んだのに…。お前が着たらめっちゃくちゃかわいくなると思ったけど…。そっか、ちょっと着てもらうのも無理か。

まぁ、完璧な真壁にも苦手なものの1つくらいはあるな」

「…誰も着ないとは言ってません」

「メイド服と合わせて、セットでコレとコレも着ないと完璧にはなれないから渡しておくな？」

「見くびらないでくださいよ、僕に出来ないことなんかありませんから。でも着るのはこの一回だけですからね、次はないですよ。あと着替えてる最中に入ってきたら殺します」

「覗かない覗かない、大人しく待ってる」

「ふん！」

真壁は基本的に完璧主義で、期待に答えるのが好きだ。そこをくすぐってやれば、答えられる範囲内ではベストを尽くしてしまう人間でもある。長い時間をかけて作られた真壁マニュアルに基づいた言葉は、思惑通りに彼を誘導した。案の定な反応を見せたちょろ過ぎる恋人は、怒りながらも全ての衣装を手にとって、俺の寝室へと消えていく。扉越しに、ばさ、ばさ、と乱暴に服を脱ぐ音が聞こえたので、順調に着替えているようだ。本当はこっそり覗きたい気持ちはあるが、おそらく扉を開けたら今度こそ絶対に機嫌をそこねるので、ここは大人しく座って待機する。

しかしながら、諸々細々した衣装は多いものの、五分、十分と経過するにつれて、着替えにしては長くないかと思い始めた。十五分が経過したとき、さすがに妙だと思い、寝室の扉をノックして声をかける。

「なぁ真壁、着た？なんか着方が難しいやつとかあったら無理しなくても」

「い、いえ、着れたは着れたんですけど…。見た目が想像以上にきつ過ぎて」

「え、着たなら見たい」

「菅原さんには、心の準備を待つデリカシーとかないんですか？僕のタイミングで出ます、その扉から離れてください」

「入っちゃダメ？」

「絶対ダメ」

中にいる真壁に話しかけると、彼から返事は返ってきた。しかも、もう着替え終わっているらしい。俺の寝室には姿見の鏡があるので、真壁はそれで自分の格好を確認したのだろう。恥ずかしがるくらいなら見なきゃいいんじゃないかと思うが、よく考えたら完璧主義なあいつが、よれたリボンやカチューシャを許せるわけがないのだ。なんで自分から苦しむ方向に突っ込んでいくんだと心の中で思うも、それが真壁という男なので仕方がない。

だが、奴はきっちり漢気を見せられる男でもある。覚悟を決めたのか、体育座りをして扉前で待機する俺の前で、ゆっくりとドアが開いた。

「お、お、お待たせしました...」

待ち望んだ姿に、思わずおお、と声が出た。体型をカバーするためのロング丈のメイド服は、清楚で俺の好みど真ん中。なるべく露出を避ける服は、首元まで生地があり、喉仏を隠すリボンがついている。黒くてフワフワのドレスを包むエプロンも、たっぷりのフリルがついていて可愛らしい。真っ赤な顔の上に乗るカチューシャすらきっちり身に纏っているのは、渡されたものを全て着た証拠だろう。

だが、これはあくまで見える部分においての評価だ。俺が真壁に渡した物は、この表面に見えるドレス部分だけではない。

「すごい。現段階でも破壊力がすごい」

「それはなによりですね」

「...ちなみにだけど、渡したやつって全部着た？」

「セットで着てほしいとご要望があったので」

「それも見せて」

長いドレスの足首からは、白い靴下が見えていた。しかし、彼に渡したのは白いニーハイの他にもある。男とは見えないところにも、ロマンを求める生き物だ。真壁が着たというなら、見ないわけにはいかない。

心を決めたと言ったのは嘘ではなかったらしく、真壁は俺の言葉に逆らわずに、おずおずとスカートを掴んで上へと持ち上げた。すると、彼の足の間がチラリと見える。

真っ白なニーハイは、太ももの中間地点で肌色に切り変わっていた。その布が落ちないように固定するのは、同じ色で選んだ白いガーターベルト。白い線が繋がる先まで目を動かせば、今度は純白総レースのどエロい下着が目に入る。少々透けて見える彼の熱に、限界が訪れた。感無量だと鼻息を荒くし、スカートの中の夢の世界に思い切りダイブする。

「んぐっ！たまらんっ！エロすぎる！」

「うぎゃあ！？ちょっと、動けないんですけど！」

「世界一ドスケベな暗闇だ。俺はこのまま遭難したっていい。幸せ、俺ここに墓を立てるわ...」

「発言がキモ過ぎます！すぐに出ろ！この変態！」

がぱりと真壁の太もものに抱きつくと、彼は少しよろけてスカートを手放した。そのせいで視界は暗くなったが、顔の位置に真壁の股間が丁度当たっている。最高だと大きく息を吸い込んだら、容赦なく後頭部を引っぱたかれた。普通に痛い
が、この位置を譲る気はない。

顔を少し擦ると、レースの感触が頬に当たる。素晴らしい、これを真壁が着ていると思うとなおさら。

けれども、真壁の羞恥はこのあたりで限界に達したようだった。激しい抵抗が始まり、暗闇の中での攻防戦が始まる。

「もう脱ぎます！見たから満足でしょ！」

「だめ！やだ！まだエロいことなんにもしてない！」

「脱いでからしたらいいじゃないですか！」

「このまましなきゃ意味ない！」

「ひうんっ！？」

視界が悪い分俺が不利だが、それをカバーするのは快感による追い込みだ。週末にどちらかの家で夜を過ごすのだから、お互い既にその気にはなっている。いつもと違うことはあれど、ムラっているのは真壁も一緒のはずだ。

下着越しで、そのまま真壁の熱を舐めた。ざりざりとした生地が舌に当たる。糸の間で本物の肌に触れているのも感じた。はむ、はむ、と玉の部分も食んだりしながら、徐々に彼を昂らせていく。

「あ、あ、ま、って、やだ、舐めないで...！」

「なんで？勃ってきてるけど」

「ッ、うう、や、それ、下着、変な感じ、するから」

「直接舐めろって？」

「うあっ！？」

わずかな快感でも感じ取る身体は素直で、足の力が緩んできた。閉じていた足を開いて舐めやすくすると、真壁も俺の肩に手をつけて声をあげ始める。本気で止めろとは思っていないあたり、意外とアイツも乗り気らしい。この一週間、忙しいと言って真壁の欲求をためてやっただけはある。

小さな下着は防御力が低く、少し横にずらせば、簡単に性器が飛び出てきた。ねとりと側面に舌を這わせてから先端を吸えば、ガクガクと真壁の膝が揺れる。

「んんううっ！は、あ、ま、まって菅原さっ、僕、あんまり...！」

「もう出る？早いな、今日。お前もコレ着て興奮した？」

「ッ...！く、ふ、ううんんっ！！」

舐めながら少し言葉でいじめてやると、心のツボを突かれた真壁は静かになる。見えないが、きっと真壁の顔は真っ赤だろう。彼からすると、俺がしていることがスカートに隠れて見えない分、予想しづらくて余計に感じるのかもしれない。ぎゅ、と肩を握っている手に力がこもる。足がガク、ガクッと揺れて落ち着かなくなってきた。だめ、やだと服越しに声が聞こえるが、無視して彼の熱を咥え続

ける。舌で先を軽く叩くように舐めたり、吸いながら口を上下に動かしていけば、お預け期間を十分に与えた真壁は、あっさりと絶頂にたどり着いた。

「ふぁ、あ、や、はげ、し、い、まっ、待っ、ッ、あ、うっ、ん...！ひ、あ
あぁあううっ！！」

ぎゅ、と俺を膝で挟むようにいきんだ真壁の熱から、濃い精液が出てくる。それを口内で全部受け止めてから、自分の手に吐き出した。寝室にローションを置いているが、取りに行くのが億劫なので、今はこちらを代用させてもらう。一度イッた真壁は、脱力して床に沈みかける。その腰を強引に抱えて、精液と唾液で濡らした指を、下着の隙間から彼の孔に入れていった。シャワーを浴びた時、ある程度準備していたのか、真壁の中にはするすると指が侵入していく。

「んあっ！？や、やだ、待って、今イったからっ！」

「ん～？ダメだろ、ご主人様が楽しんでる最中に、メイドがダメ出ししたら」

「はぁ！？今日、そういう感じですか...！」

「そりゃあ、せっかく着てもらったし？設定は大事にしないと」

「べっ、別に主人側が、エロいことしなければいいだけで、っ、くっ！？うぁ、それ、それヤバい、い、ッ、ひ、ひううっ！！」

レースの下着は、既に俺と真壁の体液で湿り気を帯びていた。それにかまわず舌を這わせて、再び彼の熱を舐める。今度は露骨に感じさせたかったので、先端部分のみ咥えて、執拗に亀頭を舐めまわしてみた。同時に中の指も動かして、彼の

良い場所を探っていく。下着が邪魔で指が動かしづらかったが、無事に前立腺に指が届いたので、内部からも真壁に快感を与えていった。

指の第一関節を曲げて甘く押し込んだり、指を出し入れして擦ると、ガクッと真壁の身体が傾き、俺の方によろけた。倒れないように支えてやりつつも、尻を撫でたり、下着を引いたりして、快感を蓄積するのも忘れない。

「んあ、あっ、や、だめっ、そんなにしたら、また、またあ...っ！」

「またイキそう？人にエロいことするなって言うわりに、何回もイッちゃうメイドさんもそこそこえっちじゃね？」

「っ、ちが、ん、ぼ、くは、エロくなんか」

「ほんとに？膝ガクガクさせて、立ってられないくらい感じてるくせに？」

「ふああああ...ッ！あ、ああう、んっ、んんんんっ！！」

意地っ張りな真壁は、あくまで俺に非があると言ってくるが、悪いのがどちらかなんて今は関係ない。俺は真壁をいじめるのが楽しいし、真壁は訳が分からないまま感じていればいい。それに、俺から指摘を受けてイクのを我慢しているようだが、それこそ無駄な抵抗だと思う。

2本目の指を入れてから、わざと指を広げて孔を開いた。覗く内側を、チロチロと舌先で舐めてつつく。わずかに舌がかすめるくらいで身体をガクつかせている癖に、よく達しないまま我慢出来ていると思う。もっと追い込んでやれと、舌を中に入れつつ、彼の熱を素早く扱う。

「や、あ、っ、ひうっ！？ん、だめ、あ、や、入れないでっ、あ、あう、っんんんう！！やだ、舐めるのやだあああっ！」

拒絶の言葉が聞こえてくるが、返答もせずに舐めしゃぶってやった。じゅる、と時々音を立ててすすると、羞恥を煽れるのでなお反応が良くなる。服が汚れることすら気にかける余裕がないのか、真壁の手が服ごと自身を握ってきた。これ以上擦ると、俺の手を押さえるために四苦八苦しているらしい。

とはいえ、服の上から俺の動きを完全に見切るのは難しいだろう。前がダメなら中を責めるまでと、指と舌で真壁の孔を徹底的に愛でてやった。そして後ろの攻撃を気にして彼の手が熱から離れた瞬間に、先端部分を手のひらでしっかりと包むことに成功する。

「くっ、うううっ、ああ、や、舐めすぎ、で、ッ、んんんっ！い、一緒に擦っちゃ、あ、あっ、はうっ！？うああ、やだ、全部はズルい、無理、無理いっ！！」

「あ〜あ〜、ビクビク止まんなくなってるよ、コレ。ほら、無理無理、我慢無理だからイクイクイク……」

「〜〜〜ッ！！ふ、ふっ、っぐ、ん、ンンっっ！！！」

元々連続でイキそうだったのを、真壁が意地で堪えていたに過ぎない。メンタル面もかなり強い真壁ではあるが、感じやすいコイツが我慢できるかと言われると、答えは否だ。最後は面白いくらいにあっけなく精を放っていた。手で押さえても吹き出る精液は、スカートの中と下着にも飛び散り、服を汚していく。

息苦しさをを感じる程、スカートの内側は熱気がこもっていた。満足したので暗闇から抜け出ると、支えを失った真壁が床にへたり込んだ。荒く息をつく彼は、股の間に両手で押さえて顔を伏せている。

「う、は、はぁ、はぁぁ...っ！」

「あっという間に2回もイっちゃったなぁ。しかも服まで汚して。せっかく用意した衣装汚すようなメイドさんは、お仕置きが必要なんじゃないか？」

「っ、最低、最低ですから！どうせ最初からそのつもりでっ」

「はいはい、じゃあお仕置き会場に移動しましょうね～」

「やだやだやだっ！行きたくないっ！」

肩で息をする真壁は、口答えできる気力はあるようだが、たて続けにイッたばかりで身体はヘロヘロだった。言いなりになっているうちに、腕を引いて寝室に引きずり込む。そして脱力した彼をベッドに放ってから、クローゼットの中を漁った。明らかに不審な行動を取る俺に、真壁は警戒心をむき出しにしている。

「何してるんです？菅原さんもメイド服着るんですか？」

「俺がそれ着て嬉しいか？あいにくコスプレ衣装は1着しか用意してない。ていうかお前も、もう少しメイドっぽくふるまえよ」

「どんなことをするのが、メイドっぽいふるまいなのか知りませんし」

「ん～、そうだなあ、まず第一にご主人様はマストでほしいよな」

「そうですか。じゃあもう寝ましょう、ご主人様」

「生意気なので却下」

ほどほどに会話をしていると、お目当てのものに手が届いた。奥にしまっていた段ボール箱を取り出して、ベッドのそばに持っていく。真壁はそれだけで何かを察したようだが、閉じた上の部分を開いて中身が見えたと、露骨に顔をしかめた。

「買い込みすぎでしょ、アダルトグッズ」

「見た事あるのもいっぱい入ってるだろ？でも、いつか試してみるか～って買ったくせに使ってないのも割とあるんだよな。せっかくだし秘蔵系出していい？」

「菅原さんの秘蔵ほど怖いものはないですよ…」

「今日は菅原さんじゃなくてご主人様です。あと、これからお仕置きされる側なんだから、もうちょっと俺の機嫌取っといた方がいいんじゃないかねえの」

「僕、優しめの玩具が好きだなあ、ご主人様！」

「ふうん。参考程度に聞いとくわ」

段ボール箱の中には、俺が購入したアダルトグッズ類が保管してある。真壁とのプレイに使ったものも多いが、全てを網羅したわけではない。未使用のままおいておくのはもったいないので、封を開けていないものを優先的に使うことにする。

俺がまず手にとったのは、形状としては優しめのバイブだ。これなんかどうだと思わせると、真壁は渋い顔をしながらも、まあこれならと嫌々ながらに了承してくれた。本当は無理矢理入れてやってもいいのだが、最初の1個くらいは彼の意見を尊重してやる。

「よし、ならコレ入れながら俺のも舐めてもらうか。準備するからスカートめくって四つん這いになっというて」

「え、このまま入れるんですか？もう汚れてるし、脱いでもいいんじゃない...」

「出てこないように下着で押さえておけるし便利じゃん」

電池を入れて動作を確認してから、俺はバイブの中にあるものを注入していく。

これが肝になることは、後ろ向きに伏せる真壁は気づいていない。なぜなら彼は、これをシンプルなバイブだと勘違いしているからだ。

ローションを纏わせたバイブを、既に慣らしてある孔に入れていく。根元の部分まで入れてから、下着で押さえる。サイズ感の小さな下着は、バイブが動いてもしっかりと固定してくれそうで安心した。

「さあ、準備できたし、そろそろ俺のも舐めてもらえん？」

「今日って、これ以外使う予定とかあるんですか」

「それはお前の頑張り次第」

そして、軽々しく会話をしているが、真壁のエロい姿を見続ける俺のもかなりキツい状態になっている。できれば早く触ってくれと思ってもいるので、そそくさと自分の着ていたズボンと下着を脱ぎ、ベッドの上に座った。正面に這ってくる真壁は、四つん這いの姿勢を崩して更に前かがみになり、俺の熱の前に顔を持ってくる。

上から下にキスをしてから、玉を揉みつつ、舌を貼り付けて側面を舐める。俺が真壁にやったことを真似ているのは、おそらくあえてだ。彼を見下ろすと、少々得意げな笑みで返されたので、そろそろ立場を分からせてやろうと思う。

手元にあるバイブのスイッチを入れると、ガクンと真壁の腰が揺れた。ふ、と苦しそうな息をはいた後は、一気に顔が赤くなり、彼の舌使いが鈍いものになる。

「んふ...っ！！？ふ、う、うう...！」

「どうした？まだスイッチ入れたただけだけど？」

「っ、別に...！ん、っく、ちょっと、驚いただけでっ」

「じゃあつべこべ言わずに舐めてもらっていい？」

「い、われ、なくても...！」

俺から揶揄されると、真壁は悔しそうな顔をしてから、必死で俺のモノを咥え始めた。ただし、彼に入れたバイブ自体は作りもシンプルだし、振動も単調で、今はまだ弱い方にしている。だから真壁もどうにか踏ん張れているが、この玩具の面白いところはここからだ。意地になってしゃぶる真壁の頭を撫でながら、俺はリモコンの別のスイッチを押す。

「んんんうっ！！？ひゃ、あ、やっ、なっ、なに、なんか出てっ！？」

「これ、疑似射精モードみたいなのがあってさあ。中にローション仕込んでおけんだよな。っていっても都度補充しないといけないから、1発しか出せないけど」

「う、う、な、か、ヌルヌルに、なって...！ひ、ッ、う、うう〜〜〜...！」

ボタンを押してすぐに、真壁は大きく全身を揺らして、俺の腰にしがみついていた。これはおそらく、快感というより冗談抜きに驚いたせいだろう。ただ、バイブから放出されたローションによって振動が伝わりやすくなったのか、ビク、ビク、と俺にしがみつきながら腰を上下させていた。

しかし、驚くのはまだ早い。なぜなら真壁の中にたっぷりと放たれた液体は、ただのローションではなく媚薬入りだ。いつか使ってみたいと思っていたが、機会がなくそのままになっていた。どうせならたっぷり使ってしまえと、バイブにも塗りたくっている。そろそろ最初に塗った分がきいてくる頃だとは思うが、時間差でどんどんバイブから出た分の効果も出てくるだろう。しっかり浸透するまでは、弱振動で焦らしておく。

明らかな変化が出始めたのは、真壁の腰がへなへなと落ちるようになってからだ。最初はどうか踏ん張っていたようだが、上下に揺れる腰の落ち着きがなくなって、とうとう先ほどベッドに崩れて動かなくなってしまった。バイブの動きは変えていないので、おそらく媚薬の効果が出てきたのだろう。その姿をニヤつきながら見下ろしていると、何かに気づいた真壁が、俺を見上げながら睨んでくる。

「う、はあ、はあ、っんん...！っひ、う、っくうっ！！」

「おいおい何してんだ。サボらず頑張れよ」

「さ、っき、バイブから出たの...！絶対、ローションじゃないでしょ...！」

「ちゃんとローションですけど？エロいメイドさんが勝手に変なこと考えてるだけだろ？」

「や、あ、嘘、絶対嘘...！はう、う、も、やだ、あ、あああああっ！」

時間と共に効果が強まるのか、真壁はいよいよ我慢できなくなったようで、自分の股間を押さえて丸まってしまった。俺への奉仕を中断して、へたりと俺の太ももに頭を乗せている。それはそれでかわいい仕草ではあるが、今はお仕置き中だ。勝手に自分だけ気持ちよくなるのもどうかと思うので、バイブの振動を強めつつ、服の上から手を当てて、更に奥へと押し込んでやる。

「うあああああっ！！！？ひっ、や、ああああやだやだっ！だめ、奥や、だ、あ、あああっ！」

「だってメイドさんが奉仕もしないで自分ばっか良くなってるから？お仕置きが足りないかと思って」

「ひぐっ、ッん、ンンうううっ！！やあっ！だめ、止めて、強い、これじゃ舐められないいいっ！」

「舐めれないなら手で扱いたりすれば？ちょっとは努力してるそこ見せてくれなきゃ、止めてやれないかも」

「んんんゝ...ッッ！！ひ、ひっ、う、ッくうううう！！」

やめろと言わんばかりに、真壁の手が俺の手首を握ってきた。それを振り払って、アイツの手ごと服の上から押し当てる。一緒に握りながら、時に押し込んで、引いてとくり返すと、首を振って嫌がっていたが関係ない。反応を見ながら

角度を変えて遊んでいると、ひどく声が上ずるところがあったので、そこに狙いを定めて押し込む。すると真壁はぎくりと身体を軋ませた後、面白いくらいに腰を揺らしていた。片手ではなんとか俺の自身をゆっくりと愛撫していたが、強い快感に負けて、手の動きも止めてしまう。

「はひ、いいいいいゝ いゝ いっっ！！やああっ！そこだめ、ああああダメダメダメえええっ！！」

「えっちな腰つきになってますよ～、メイドさん。お仕置きで感じ過ぎ」

「んんふっ！！だ、え、も、もう無理、ああ、あ、っ、～～～っっああああああ！！！！」

ぎゅう、と真壁の身体が強張って、ガクン、ガクンと大きく揺れた。さっき寝室に入る前で2回イカせているし、媚薬も効いているから、単調な刺激でも中イキしてしまったらしい。まったくもって自制のないエロメイドだ。お仕置き中という自覚が足りない。

ふ、ふ、と荒く息をして痙攣する真壁の首をくすぐりながら、バイブの振動を弱にする。手首を捻ってバイブを回すと、ひきつった声を上げた彼が、手元のシーツを握って悶えまくっていた。

「あく、う、うあああああ.....ツツ！！やあゝ、だめ、今だめええええ...！」

「だから、ダメダメ言いながら何もしてないじゃん。仕事サボり過ぎだって。早く舐めるか抜くかしろよ」

「ッ、ッ、じゃ、せめて、バイブ取って...！」

「これがお仕置きって忘れちゃった？あと口調も生意気だわ。もう一回ぐらいイカないと敬語も分かんないか、ドスケベメイドさんは」

「んんゝ ああああぁっ！！？やだっ、ほんとにやだっ！！ンンんんんうううだめだめっ！中、今ヤバ、あ、あ、ふ、ぐっ、っんん、んゝ ～～～～
～ッッッ！！！！」

既に内部は出来上がっているようなので、強振動に戻して奥に差し込んでやれば、真壁は簡単にイッた。俺の下で動けなくなる真壁には悪戯し放題なので、一旦バイブの方は手を離して、別のところを触って遊ぶことにする。手を離しても、下着が押さええてくれるので便利だ。

上等な布の上からだと位置が分かりづらかったが、まずは服の上から乳首を擦ってみる。何度か擦れば、徐々に主張するようになった突起がはっきり分かるようになった。尖る先端を布越しに引っかけてやると、胸を守るように真壁が後ろに後退していく。

「ひゃうっ！う、うううっ、だ、め、やだ、やめて...！」

「こらこら、ご主人様から逃げんじゃないよ。ほんっとに手のかかるメイドさんで困る」

「やっ、ちょっ、と、何、離して、やだ、やだっ！」

下に突っ伏す真壁を見ても征服欲は満たされるが、真壁側にもそれなりに自由が効くのが厄介だ。彼が奉仕を諦めたなら、この体勢にもそれほど意味はない。逃げるばかりになる真壁の身体を掴んで起こして、俺に背中をもたれさせる。自重

でバイブが刺さってまたイッている隙に、首元のリボンを緩めて、服のボタンを外していく。

「っく、は、あゝ ああああゝ ああ...ッッ！！ひ、っ、あ、あううう...！」

「ご主人様放置で何回イクの？エッチすぎだって」

「ひゃっ！？あ、あ、待って、待ってえっ！」

ボタンを外して片手を服の中に忍ばせつつ、もう片手でスカートをめくりあげると、ドロドロに濡れて透ける下着が目に入った。真壁の熱に、レースの下着がぺったりとくっついていて卑猥だ。するりと撫でると、ぐんと背をしならせて悶える仕草もエロい。

さわ、さわ、と淡く真壁の自身を撫でながら、乳首を直接刺激する。親指と人差し指でつまんでクニクニと揉むと、だめ、と言いながら真壁が俺の腕にしがみついてくる。その妨害をよしとしない俺が、耳元でこら、と低い声でたしなめると、びく、と首をすくめる真壁の手の力が弱まった。

「んひっ、ッ、あ、あ、や、だめ、だめええ...！」

「こら。ダメだろ、俺のこと邪魔しちゃ。足ももっと開いて」

「や、無理、イッちゃう、触られたらイッちゃうから...！」

「イカせるから足開けて言ってんの」

「え、わっ、ちょ、ッ！？や、やだ、いやあああっ！！」

ただし、真壁は胸の方は手を緩めたが、足の方はどうにか俺の手を阻止しようと、躍起になって膝を閉じていた。きゅう、と前かがみになって、腕を伸ばしにくくする徹底ぶりだ。その体勢だと胸も責めづらくなるので、割と本気でイキたくないらしい。

だが、甘い。俺だって真壁の扱いには長けている。ちょっとやそっと抵抗されたくらいで許してやる気はもたらないので、俺は真壁の腰に両腕を巻きつけて、そのままころりと後ろ向きに倒れ込んだ。いきなり仰向けになったことで、驚いた真壁の防御が外れる。そこを狙って彼の足の間に自分の足を入れて、強引に開脚させた。がら空きになった場所に腕をすべらせて、下着から真壁の熱を引っ張り出す。先走りでドロドロのそれを扱くと、上にいる真壁の身体が落ちそうなくらいよじれて悶える様はなかなか良い。

「ひいいいっ！！？いやっ！イッ、く、はう、出、ちゃ、あ、あああ
あっ！！」

「後でこれにも媚薬ローション塗って遊んでやるよ」

「っ、無理、や、あ、あふ、んんんっ！！っひ、あ、止めて、バイブ、抜
いッ、っは、はう、んんんんっ！んんんあああああっ！！...っ、っく、う、
やっ、もうやだっ、助け、で、イク、イッちゃ、あ、あ、あ、〜〜〜ッんんうう
うっ！！」

「こら、あんまいきんだら抜けるだろ？気持ちよくしてくれんだから、しっかり
入れとけて」

「あふううう...っ！ああ、あ、あううっ、ん、んんンンっ！！はひ、い、い
あ、ああっ！！や、イク、イク、んんっ、んんんぐっ！！っは、あ、いや、やめ
で、も、無理っ、無理無理無理っ！！」

「無理って言われてもなあ。お仕置き中だから無理」

「————.....ッッ！！！！っふ、う、うううンンン...っ！！は、ああああああ
あああグググう、う、ううああああっ！！やあっ、も、許し、ッ、あ、あああ
ああ`あ`ああああっっっ！！！！」

やけに濡れている真壁の熱を擦ると、面白いほど簡単にイカせることができた。
どうやら真壁の自身も、後ろから溢れたローションの影響を受けているらしい。
なんだ、それなら後で直接媚薬ローションを塗る手間が省けたなと思いはしたが、
敏感になってかわいそうにと思うことはない。むしろ都合がいいくらいだ。
イッて身体が強張ると、生理現象で腹に力が入るせいで、ずらした下着の隙間か
らバイブが抜け落ちそうになる。それを入れるフリをしながら抜き差ししたり、
良い場所に当ててグリグリと押し込んでやると、真壁は泣き叫びながら俺の腕を
引っかいていた。相当感じているようで何よりだ。

イカせまくると、真壁があうあう言うばかりになって、抵抗力が落ちていく。ビ
ク、ビク、と俺の上で静かに跳ねる彼の乳首をきゅっとつまむと、それだけで甘
イキしているようだった。

「ふあ、あ、あ、あふっ...！んん、んんんうううう...！」

「やっぱいくら敏感になってんなあ。そんなに効くんだ、媚薬ローション」

「はひうっ、う、うう、ん、んんん...っ！あ、あ、ああああ...」

イキ過ぎている真壁は、もはや俺の腕を掴む握力もないらしい。だらりと腕を落として、快感を受けるときだけ反応を見せている。既に支え無しでは、身体を俺の上に置いておくのも厳しいようだ。

どうせ目立った抵抗もできないなら、メイド服も顔も堪能できる体勢でやる方がいい。頃合いだろうと、俺は真壁の身体を起こして、仰向きで寝かせてやった。彼は焦点の合わない目を天井に向けながら、は、は、と身体を震わせて息をしている。

「ふ、っ、あ、あ、うう…」

「お〜、珍しくかなり出来上がってんじゃん。メイド服効果か？いや、普通に媚薬か？あんま使わないもんな、薬系は」

話しかけても返事はない。おそらく意識はギリギリ保っているが、会話はできないのだろう。それならそれで、次の準備をしながら真壁の回復を待つまでだ。

真壁から抜けかけていたバイブを引き抜き、濡れて使い物にならない下着も脱がせる。スカートを腹までめくってから、膝を立てて足を開いた。身体の中心部は彼の精液とローションで大惨事になっていたが、構わず媚薬ローションを追加してやる。正直もう塗らなくても十分に敏感になっているが、更に快感を得られた方がいいだろうという俺の気遣いだ。メイドに対しても優しさを忘れない俺は、出来た主人だと言えるだろう。

真壁の熱に丹念に塗り込んでから、内部にはボトルの口を当てて大量に流し込んでやった。冷たい感覚がするのか、媚薬ローションだと気づいたのか、わずかに

覚醒した真壁は嫌がって足を閉じようとしていたが、俺の身体がブロックしているので無駄だ。うう、と不満そうに呻いている真壁に、たっぷりと注入してやる。

仕込みが終わると、大分真壁の意識が戻ってきた。覇気は弱いけど、俺を睨んで軽く膝で蹴ってくることは出来ているので、そろそろいじめる時間に切り替えてもいいだろう。

「っ、ちょ、っと...！ま、まだ、やる気ですか...！？」

「ご奉仕の一つも出来ないくせに、文句ばかり一丁前に言うんですねこの淫乱メイドさんは。まあでもエロい分野が得意なら、特技を活かすって手もある」

「あ、んんっ！！？」

もしも彼が俺を舐めてイカせていたなら話は変わったが、無様に一人でイキまくっていたのでお仕置きは続行だ。新しい玩具を両手に持って、まずは一つ分を真壁の中に入れていく。

スティックタイプのバイブは、先端の部分に膨らみがあり、そこが細かく震える仕様になっている。これも作りはシンプルだが、使い方によって色々遊べるのがいい。それほど太さはないので、1本分を先に入れてから、反対の手に握った分も挿入していく。

「ひ、ゃ、やだっ、なんで2本も、入れて」

「淫乱メイドのお仕置きするのに、1本くらいじゃ張り合いがないだろ？これで前立腺挟み撃ちにしてやる」

「はあ！？ちょ、ふ、ふざけないでください、やってること鬼ですよ！」

「まあまあ、もう少し待っとけよ。どうせやるなら、さっき入れた媚薬が効いてきてからの方がいいもんな？」

「んう、う、あ、ああああ...ツツ！！？」

たっぷり潤った中には、難なく2本分が入っていった。さっきと比べて本数は多いかもしれないが、そもそもが細い作りなのでさほど苦しくはないはずだ。とはいえ、震える機器に前立腺を挟みこまれた経験はないだろうから、真壁にとっては素晴らしい体験になるだろう。

せっかくの貴重な初体験だ。彼により感じてもらえるよう、今は一つ分のスティックだけ弱振動にして抜き差しする。もう一つの方は、あえてスイッチを入れないままで前立腺を擦った。いつでもここに直接振動を加えてやるという、無言の圧をかける。

ただ、真壁はまだ入れたばかりであるというのに、既に腹をヒクつかせて悶えていた。耐え性のないエロメイドは、この程度でも感じてイキそうになっているようだ。

「ッ、く、は、はあ、んん、ん、く、くうう...！」

「おいおい、まだ入れたばかりなのにもうイキそうなのかよ。どうすんの？こっちだってスイッチ入れられんだよ？」

「んんうううんっ！！？」

エロい姿を見せられると、つい予定外のことをしていじめたくなる。本当は真壁に追加で入れた媚薬が効いてくるまでは焦らしてやろうと思っていたのに、うっかり前立腺に乗せている方のバイブのスイッチを入れてしまった。そのまま少しだけ力を入れて、良い場所を震わせながら押し込む。

「うああっ！？やっ、あゝっ、やめっ、え、っんん！！」

「あ、悪い悪い、手が滑ったわ。まだ早かったなあ」

「ひう...！」

感じやすい場所に、分かりやすい刺激。強い快感が与えられた真壁は、大きく身体を揺らして身もだえていた。ぎゅっと枕を握って腰を浮かせている。きっとあと一步でイキそうだったに違いない。だが、イカせてはやらない。スイッチを切ると、切なそうに眉を寄せていた。その顔から完全に余裕が消えるくらいまで、まだまだ焦らして遊んでやる。

「あんまり動くと、また間違っってスイッチ入っちゃうかもしれないからな～。大人しくしとけ？」

「ん、んん...！や、嘘、動かなくても、どうせ...っ」

「何？なんか文句言ったか今」

「ひぐううっ！！？んはあっ！は、は、ま、あ、あぐっ...！！」

「おっと、また間違っってスイッチ入ってたわ。いやあ、これ手元に電源あるからさあ。操作ミス出ちゃうな、たまに」

「ふ、ふっ、...っ、ぐ...！やだ、もう、するなら早く...」

「やるタイミングは俺が決める。早く気持ちよくなりたいからって、主人を急かすような生意気な発言は謹んでくださ〜い？」

「ひいいいいッ！！」

前立腺の上に固定した方のバイブのスイッチを、入れたり切ったりして楽しむ。わざとかなと思うくらい見事な感じっぷりを見せてくれる真壁のおかげで、全然飽きることがない。それに片方の電源を切っていたとしても、バイブはもう1本ある。緩く入口を震わせたり、奥まで進んだり、前立腺の手前をしつこく擦ったりするのも面白い。良い場所に届きそうな時、欲しそうな目つきになっていることを、真壁は自覚しているのだろうか。

そしてねちっこい愛撫を続けているうちに、真壁の声が徐々に引きつったものに変わってきた。開いていた足が、何かを嫌がるように閉じていく。これはおそらく、媚薬が効いて感じやすくなってきたからだだろう。俺はこういう時の真壁の心を見抜くスペシャリストなので、隠し事はできない。

頃合いだと踏んだ俺は、さっきまではスイッチのオンオフを繰り返していた方のバイブの振動を強にして、前立腺に当てながらゆっくりと擦ってやった。途端に身体が反り返る様子は、まさに一種の芸術かもしれない。

「んあああゝ あゝ あああっ！！？あ、は、あひう、うっ、んゝんゝ ～～～
～っっっ！！！」

ピンポイントで与えられた刺激に、ガクンと真壁の背がしなっていた。ぐっと全身に力が入って、下半身が痙攣していく姿から察するに、中イキしている真っ只

中と言ったところだろうか。媚薬に侵された上に、執拗な前立腺責めにあったのだから、真壁くらい開発が進んだ男なら当然の事ではある。

けれども、今日は真壁の歴史の中で、初めて前立腺が両サイドからもみくちやにされる特別な日だ。今は意識が飛びかけているので忘れてしまったようだが、俺はもう一つバイブを手を持っている。良い場所が挟み撃ちになるのがどれほどの快感かは、身を持って味わってもらうことにしよう。

前立腺を擦っていたバイブを、少し横にずらした。通り道が出来た所に、弱振動にしていた方のバイブの先を当てる。は、と真壁が自分の中心を見た瞳があまりに焦っていたので、期待に答えるべく両方を強振動に変えた。

「んんんひ.....っっ！！！？っは、あ、ああああゝ あゝ あゝ ああああああああ
あッッッ！！！！」

真ん中のしこりを挟むように、ぐにりと両サイドからバイブを押し付けると、ベッドから飛んでいきそうなくらい真壁の身体が跳ねあがった。それを無視してくにくにと両方のバイブを動かしていくと、彼の両手が俺の手首を握ってくる。

「やあゝッ！！すがわら、さ、それだめっ、ダメええええっ！！」

「菅原さんじゃない。ご主人様」

「ッ...！！！！や、やめ、で、ください、ご主人様ああっ！！ひぐっ、う、ほ、ほんとに、無理、あ、ぎっ、い、~~~~~ッッッ！！！！！！」

俺の期待以上に感じまくっている真壁は、いつにも増して抵抗を見せてきた。ジタバタと左右に身体を振って転がってみたり、嫌がっていたご主人様を言うという歩み寄りも見せてくる。けれども甘くないご主人様は、メイドを躑めるために手抜きはしない主義だ。暴れて位置がズレたらすぐに修正した。快感を無くすことも、減らすことも許しはしない。

「メイド側がダメって言って、主人側が言うこときくのはおかしいだろ？そのくらい常識で分かれよ」

「んんんんううッ！！ひっ、あ、あ、あ、あ、や、あ、も、お、おあゝ、あゝ...ッッ！！はっ、はっ、あ、やえで、これ強い、キツいいいいっ！！」

「別にイクなとか、感じるなって言ってるわけじゃないだろ？気持ちよくなってもいいから耐えろ。逃げてないで足開け」

「ゃあああああっ！！出来ない、出来ないいいいいっ！！」

「じゃあもっとキツいお仕置きに変えるか？」

「んぐううううッッ...！！！！は...！ううゝ...っ！！」

とはいえ、真壁は普通の男よりも前立腺で上手に感じられる。たて続けにイカせてからの過酷な責めは、こいつにとっては過剰な快感になったようだ。ぐりっと両方のバイブで思い切り押し込んだら、一瞬白目を向いて息が止まりかけた。おや、このままでは失神しそうだと気づいたので、さっと片方のバイブを抜き、もう一つの方は中に残したまま、電源を切って前立腺から位置を外しておく。

「か、は...！は、はひ、う、う...！」

誉め言葉になるのかは分からないが、真壁は俺との様々なプレイを経験しているので、それなりに快感に耐性がある方だと思っている。体感ではあるが、これほど早く意識を飛ばしそうになるのも珍しい。よほど前立腺責めが苦手だったとみえる。あまり続けると本番にいく前に意識を失ってしまいそうなので、一旦はやめて別の責めに切り替えるでしょう。とはいえ、この責めがキツイと分かったのは収穫だ。何かの時、本気で泣かせる切り札として頭に刻んでおこう。

ふ、ふ、と息をする真壁は、まだギリギリ失神せずにすんだようで、鈍いながらも意識は保っている。ただ、休ませすぎると今度は体力を回復するために寝落ちしかねないので、適度に快感を与えていくことにする。

引き抜いたバイブを、今度は真壁の熱に当てた。弱振動にしながら撫でまわすと、んん、と小さく悶えた真壁が、ゆるく首を動かしながら、足を閉じようとしてくる。

「あ、ん、んん...！や、やだ、もうやだあ...！」

「だから足閉じたらダメだろって。何回言っても分かんないねえ、このエロメイドさんは」

「エロ、く、ないい...！」

「そうですか。じゃあおちんちんにコレもっと強く当てても感じたりしませんよね〜」

「ひぎいいいっ！！？」

無意識に快感を遠ざけようとする真壁は、いつもよりも俺の言うことを聞いてくれない。本能がそうさせるのだろうか、ならば実力行使で阻止させてもらう。

真壁の腰の方に近づいた俺は、彼の太ももに自分の足を乗せるように座る。こうすれば開脚した俺の足や上半身が邪魔をするから、簡単には足を閉じられないはずだ。そのせいで中にあるバイブが動かしづらくなったが、熱に当てた方は動かしやすくなった。ならいっそ今度は2つともこちらに当ててしまうかと、もう一方も引き抜いて前に持ってくる。

さっきまでは中を刺激していたものが、自分の前に回ってくるとは思わなかったのか、真壁は両手を振ってバイブを引きはがそうとしていた。けれど、先端部分に押し付けられたバイブの快感に負けて、俺の太もも近くのシーツを握ることしかできなくなっていく。

「うあああああっ！！やだっ、イク、出る、出、ちゃあ...！」

「別にイッてもいいって。耐えればいいだけなんだからイケばいいじゃん」

「ッ、嫌、いや...！イぎだぐ、ないい...っ！！」

「そっちの方向で我慢するならそれでもいいけど、耐えれんのかよ。今でもギリギリのくせに。このまま続けてたら、1分も持たなそう」

「んんんぐっ！！ふ、う、ンうう`う`ううううっ！！」

しかしながら、真壁の頭脳はここまで責めても冴えているのであっばれた。と言うより、俺が真壁の気持ちを読めるように、真壁も俺のことが分かっているのかもしれない。だから、ここでイッたら何が待ち構えているか想像できているのだろう。ちなみにだが、真壁の予想は当たっていると思う。

だからといって、彼がこの責めに耐えられるわけがない。媚薬ローションを塗りたくっているし、足も閉じられないよう固定した。無理無理、どうせイクしかないんだからとニヤつきながら見下ろしていたら、本気で我慢している真壁が悶える姿が見えて眼福だった。

「ひいいい...っ！！んんんっ！あ、っぐ、んんっ、んひっ、う、うっ、くううう...！」

「そ〜んなにビクビクしちゃってさあ。もうキツいだろ？諦めてイッちゃえば？」

「ッ、い、イッ、たら...！は、は、はぐ...ッ！と、めて、くれますか...！」

「それは無理な相談かもなあ？」

「〜〜っ！！！」

その線はないだろうと分かっているくせに、真壁はわずかな期待をこめて、俺に質問をしてきた。それに心のままの返答をすると、彼は悔しそうに唇を噛んで、動かない足を無理矢理バタつかせていた。ベチンと俺の太ももを叩いてくるあたり、かなり限界のようだ。

ここまで頑張っているのだから、変に焦らす方が酷だろう。とどめを刺すなら早いうちにと、俺は2本のバイブと亀頭を片手で握り込んで、空いた手で竿部分を扱いてやった。

「んあああああっ！！ああああダメダメダメ、イッ、ぐ、うう、んっ、ッああ`あ`あああああ！！！」

ぐぐ、と腹のあたりに力が入ると同時に、真壁の先端から白濁液が飛び散る。めぐりあげたスカートに散らばるそれらを見つめながら、俺は再び両手で1本ずつバイブを握った。そしてイッたばかりの亀頭に狙いを定めて、容赦なく押し当てていく。

「————ッ！！！！？ああああ！！嫌っ！やああああっ！！やめでっ！出ちゃう、出ちゃうからあああっ！！」

「俺がこうするって分かってたからイキたくなかったんだろ？もう諦めろって。イッたら負けなんだよ」

「い、やあゝっ、アレ、やだああっ！！止めて止めて止めてッ！！」

「だからメイドが命令すんなって。止めねえからさっさと吹いちまえよ」

「んっ、ぐうううっ！！ッ、や、やっ、ああああああやだやだっ！や、あ、あっ、うあああああああっ！！」

—続きは本編にてお楽しみください—